

# 郷土の画人 額田昭通・鈴木樫堂・桧山淡斎他

那珂市歴史民俗資料館



額田<sup>あきみち</sup>昭通は最後の額田城主、落城後は奥州の伊達政宗を頼り、その後越後の松平忠輝<sup>ただてる</sup>に仕えた。忠輝が国替えとなった後は浪人となっていたが、元和3年(1617)江戸に於いて額田久兵衛昭通として水戸藩初代藩主の徳川頼房<sup>よりふさ</sup>に仕えた。600石を得て御側同心頭・先手足輕頭<sup>おそばどうしんがしら さきてあしがらがしら</sup>となり、頼房の京都上洛にも供奉<sup>ぐぶ</sup>している。昭通は「鳴き鶺鴒<sup>うずら</sup>」の画人として知られていが、「止り木の鷹」(個人像)も伝えられている。室町時代に流行した水墨画に共通する花鳥画であるが、一般的な「松に鷹」の構図と異なり、止り木の鷹は丹精・細密に描かれている。頼房から鶺鴒<sup>うたか</sup>の免許を得た昭通が頼房の鷹を描いたとされ、昭通の武人としての人柄がしのばれる。



鈴木<sup>れきどう</sup>樫堂は寛政12年(1800)に額田南郷の庄屋を歴任する鈴木家に生まれた。市十郎<sup>しゅうめい</sup>を襲名し、諱<sup>いみな</sup>を世美、雅号を樫堂と称した。庄屋役を務めるとともに黒羽藩絵師で「鮎図」<sup>あゆず</sup>で知られる小泉斐<sup>あやる</sup>に就いて絵を学び、花鳥画・人物画を好んだとされる。同じ門人として水戸藩士立原杏所<sup>たちばら きょうしよ</sup>がいる。弘化元年(1844)45歳で歿した。唐に渡って仏教を会得したとされる菅原道真を描いた「渡唐天神図」<sup>ととうてんじんず</sup>や地元額田の私塾教師原好誼軒<sup>はら こうぎ けん</sup>の肖像(個人蔵)も描いている。



桧山<sup>ひやまたんさい</sup>淡斎は戸村の桧山仁兵衛の二男で諱は義慎、通称は貞吉<sup>かの は</sup>。鹿野派を習得し江戸に出て産を起こし商いを業とした。書画の鑑定家としても名高く古文書を好んだ。幕府に仕え天下の古文書をすべて写すことを幕府に願い出たともいう。水戸藩の学者立原翠軒<sup>たちばら すいけん</sup>とも親交があった。天保13年(1842)江戸にて歿した。自画像がある。(個人蔵)

海野<sup>うみのようこう</sup>陽光は明治14年(1881)五台村に生まれ、本名は留吉、梅城とも号した。22歳で上京し、池上秀畝<sup>いけがみしゅう ぽ</sup>の門人となった。四条派を研究して花鳥画を好んだが、動物画に秀でており、「狸図」<sup>たぬきず</sup>(個人蔵)を多く残している。狸の後ろ姿の構図や細密・朦朧<sup>もうろう</sup>の配分が見事である。

石川<sup>いしかわだいすけ</sup>大輔は明治38年(1905)菅谷村に生まれた。太田中学校を卒業後東京美術学校日本画科に入学、日本画に西洋画の写実的要素を組み入れた結城素明<sup>ゆうき そめい</sup>に学び、大輔の作品にもその影響が色濃く表現されている。

